

令和元年度第1回米子市総合教育会議録

■日時

令和元年8月28日(水) 午前9時30分から11時

■場所

米子市役所本庁舎4階402会議室

■議題

- (1) ふるさと教育について
- (2) 米子市小学校オープンスクールについて
- (3) 英語教育について
- (4) その他

■出席者

市長 伊木 隆司

教育長 浦林 実

教育委員 金山 正義

教育委員 上森 英史

教育委員 荒川 陽子

教育委員 三瓶 文乃

■出席職員

総合政策部長 八幡 泰治

総合政策部総合政策課長 長谷川 和秀

総合政策部総合政策課主任 箸本 洋祐

福祉保健部長 景山 泰子

福祉保健部こども未来局長 湯澤 智子

教育委員会事務局長兼教育総務課長 松下 強

教育委員会事務局教育総務課教育企画室長 後藤 京一

教育委員会事務局学校教育課長 西村 健吾

教育委員会事務局生涯学習課長 木下 博和

教育委員会事務局学校給食課長 山中 敦子

■傍聴者数

1人

※読みやすさのため、発言の趣旨を損なわない範囲で、口語表現、重複表現、言い回し等を整理しています。また、個人の居住地等の情報は可能な限り特定されないような表現にしております。

9 時 30 分開会

■ 長谷川総合政策課長

おはようございます。それでは、ただ今から、令和元年度第 1 回米子市総合教育会議を開催いたします。議事までの進行につきましては、総合政策課の長谷川が務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。そういたしますと、はじめに、米子市長からご挨拶を申し上げます。お願いします。

■ 伊木市長

皆さん、改めましておはようございます。本日は令和元年度第 1 回となります総合教育会議にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。また、日頃より委員の皆様におかれましては、本市の教育行政に対しまして、大所高所から様々な貴重なご助言をいただいておりますことに改めて感謝申し上げます。昨日、一昨日、小中学校が相次いで始業式となりまして、朝の通勤通学時間帯には子どもたちが元気に学校に通学する姿が市内で見られる季節となりました。

ちょうどこの休み明け、昨年はまだまだ残暑が続いていたことが記憶に新しいですが、今年に入りまして随時、市内の各小中学校につきましてはエアコンの設置の工事をさせていただいております。まだ全校には至っておりませんが、これも鋭意努力して今年度中を目指して設置をしようとしているところでございます。これは工事施工業者の人繰りや、あるいは資材繰り、全国一斉にこのエアコン設置が始まりましたので、色々と現場は苦労していると聞いておりますけれども、皆様にはご理解をいただきまして、エアコン設置を成し遂げようと思っております。

ただ、そういったことに関わりませず、教育に関する投資というものは、本市としては一番重要なポイントの一つとして考えております。やはり時間がかかったとしても、将来のこの米子のまちを、あるいは日本を背負う子どもたちをこの米子のまちからしっかりと育てていくというのは、我々に課せられた重要な使命だと思っております。この厳しい財政状況はありますけれど、そうした中においても優先順位をつけながらではありますが、積極的に教育に対して、私としては力を入れていきたいと思っておりますのでございます。

本日は今年度に入りまして第 1 回の総合教育会議になりますけれども、皆様方から忌憚のないご意見をいただきまして、本市の教育行政の発展に結び付けていく、そういった所存でございますので、どうかよろしくお願いいたします。挨拶いたします。

■ 長谷川総合政策課長

ありがとうございました。続きまして、教育長にご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

■ 浦林教育長

皆さん、おはようございます。夏季休業が終わって、今、市長がおっしゃったように、始業式、2学期が始まりましたけれども、夏休みには体育の大会ですとか、文化の大会も非常にたくさん行われて、子どもたちがそれぞれの場所で自分の掴みたい結果に向けて一生懸命頑張ってくれて、様々な良い報告も聞いております。なかでも美保中学校の生徒が高飛び込みの全国大会で優勝、板飛び込みでは2位ということで素晴らしい成績を取ってくれております。東京オリンピックへの出場内定の三上紗也可さんに続く、他にもいっぱいおりますけれども、そういった選手が育っていってくると米子市としても大変元気が出ると思っているところでございます。

それから、小学生と中学生と一緒に集まってサミットというものを行っております。そういった中で、私も終日見ておりましたけれども、子どもたちが他の学校の取組に学んで、「よし、こういったことを自分の学校でやってみよう。」とか、「さらに頑張っていこう。」と意を強くする、そういった感想をたくさん聞くことができて本当に心強く思いました。中には、「この米子市の学校が日本一の学校と言われるような、そんな学校にしていきたいんだ。」というようなことを言ってくれる中学生もおりまして、非常に心強く、そして頼もしく感じたところでございます。

今日までに2学期がほとんどの学校で始まり、2学期は“充実の2学期”とも言われますけれども、子どもたちが運動、学習、行事の中で、自分を最大限伸ばして自己実現に向けて近づいていけるような、そんな学校生活にしていけたらと思っております。

今日は総合教育会議ということで、私も教育長になりまして1年5カ月が経ちました。色々な施策を打って、学校をさらに盛り上げていこうと頑張っておりますけれど、今日のこういった機会でもまた米子市の教育課題である様々なものを皆さんと共有させていただいたりとか、それから進むべき方向をまた新たに見出したりしながら頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

■ 長谷川総合政策課長

ありがとうございました。そういたしますと議事に移りますけれども、この会議の進行は市長が議長を務めることとなっておりますので、以降の進行につきましては市長にお願いしたいと思います。

■ 伊木市長

はい。そうしますと、私が議事の進行をさせていただきます。本日、3つほどテーマを用意しておりますけれども、最初のテーマがふるさと教育についてでございます。現状の取組等につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

■ 箸本総合政策課主任

総合政策課からふるさと教育の取組状況と課題について説明させていただきます。資料6をご覧ください。まず、取組のねらいと取組への総合政策課の姿勢について、将来的に本市を背負っていただく子どもたちに対して、地域の伝統行事といった身のまわりのこと、あるいは普段生活してなかなか気づきにくい地域の魅力について改めて目を向けて考える機会を提供することによって、子どもたちが地域に対する価値の再発見、あるいは地域への愛着、いわゆるシビックプライドの醸成につなげることをねらいとしております。取組への

姿勢について、ふるさと教育を積極的に推進することで子どもたちが将来的に長く本市に住み続けてもらったり、あるいは進学等で市外に出ることもあると思いますが、その後のUターン、あるいは市外に出ても本市とつながりを持ち続けてもらったりする、そうしたことで本市の発展に力を尽くしてもらうというのを目指しております。取組によっては、学校の先生やPTAの方の依頼を受けて、全面的に協力するという姿勢で取り組んでおりまして、総合政策課のみならず、シティプロモーションを所管する秘書広報課、教育委員会、あるいは関係部局と連携しながら対応しています。

次に取組実績と取組予定について、昨年度、加茂小学校の5年生の総合的な学習で、ほぼ1年をかけて出前授業やフィールドワークに対応しました。明道小学校PTAの市役所探検ツアーについては、去年に第1回を実施し、今年度も先方から依頼をいただきまして、第2回ということで今月上旬に実施いたしました。これからの予定としては、来月、後藤ヶ丘中学校の先生から依頼をいただいて出前授業をすることにしています。本市としてはこのような取組を積極的に広げたいと思っています。先ほど申し上げた明道小学校の探検ツアーについては2回目を今回実施できまして、後藤ヶ丘中学校の学習は、昨年度の加茂小学校の取組を紹介した広報よなごの内容を見てご依頼いただいたということでしたので、そのような形で取組内容を発信し、広げていきたいと思っています。

今後の課題として、2点挙げております。一つは、様々な媒体を通して本取組を周知し、拡大していきたいと考えております。資料で紹介しているとおり、広報よなごや、先日の明道小学校の探検ツアーの内容を市のFacebookに載せたりして周知を図っているところです。学校現場の先生方のご負担等にも配慮する必要がありますが、実施して終わりではなくて、積極的にこのような取組をしていることを発信して広げていきたいと思っています。もう一つは、コンテンツを充実させる必要があると考えております。基本的に、出前授業等では共通の資料を使って説明をしておりますが、市全体の魅力も伝えつつ、校区の、身近な地域の魅力も併せて伝えていきたいと考えております。例えば、先日の明道小学校の場合では、現在、市の施策として通りの名称を付けており、明道小学校の校区には「外堀通り」があります。そのような名称を付けた背景や、そこに込められた想いも併せて伝えることによって、取組と併せて地域の魅力に目を向けていただきたいというねらいで実施しています。

■ 西村学校教育課長

学校教育課から説明させていただきます。今、説明がありましたように、これまでに市内のいくつかの小学校につきまして、総合政策課への依頼という形でふるさと教育を推進しているところがございます。現在、県におきまして、資料1にお示ししておりますような、これは県の資料ですが、ふるさとキャリア教育に関する体系的な取組を推進しようとしているところです。これは、県下の小・中・高等学校におけるふるさと教育に係る取組を系統的に抽出するとともに、保護者、地域、社会とどのような連携や協働ができるかということを整理することで、全県で統一したビジョンの下で一体的にふるさと教育を推進しようとするものでございます。まだ案の段階ですが、今後、このようなものが示されると聞いております。現在、本市におきまして、配布している「ふるさと米子の先人に学ぶ郷土資料集」、これは平成26年度に作成し、27年度より各学校において道徳、社会、総合的な学習の時間等で活用していますが、ふるさと米子の秘密や素晴らしさを知って、地域への愛着を持つ学習を行っているところです。今後、先ほど申し上げた県の方針等も受けまして、本市においても

市独自の学習の系統性や、地域や家庭とのつながりを整理しながら取組を進めていきたいと考えているところです。

■伊木市長

はい、ありがとうございました。説明は以上になりますけれども、私から一言添えさせていただきますと、7月27、28の両日、米子で恒例のがいな祭が開催されました。そこで、私は一つ嬉しかったことがありました。がいな祭自体は46回目ですけれども、この中におけるがいな万灯は34回目ということで、色々な紆余曲折を経ながらもこの米子の祭の中心として定着してきたというところがあります。今、全校ではないですが、啓成小学校が一番盛んでしょうか、こども万灯というものをやっておられます。それはずっとやってきていただいていますけれども、今年、初めて中高生の万灯が2団体出場されました。この動きを私が非常に良いと思っているのは、がいな太鼓は各小学校に連ができて始めていまして、中高生の連もありますし、それをやるために地元に戻ってきたいという大人も増えつつあります。がいな太鼓は45年の歴史がありますけれども、万灯は34年の歴史の中で、中高生にも徐々にですけれども、まだ2団体ですけれども始まっています。この学校教育課の資料1の中でも“伝統文化・芸能の紹介”とありますが、それも一つだろうと思いました。私としては、そうした動きについても全面的に支援しますと、太鼓の連や万灯の連には言っております。もちろん彼らは自前で太鼓を調達したり、万灯の竹を調達したりされていますけれども、こうしたことも一つのきっかけとして、地元に対する愛着というものを持ってもらって、将来、都会に出たとしても、「太鼓を叩くために帰りました。」とか、「万灯を担ぐために帰りました。」ということがこれから出てくるだろうと思うと非常に嬉しかったということもございます。

以上のように、様々な取組につきまして、市長部局では多岐にわたって行われています。今の話は、市長部局では文化振興課や商工課が担いますが、そうした取組は全市を挙げて横断的に取り組んでいきたいと思えます。

そうしますと、皆様方からこのふるさと教育の現状につきまして、なんなりとご意見、ご質問、あるいは提言等をいただければと思いますが、いかがでしょうか。では、金山委員。

■金山委員

例によりまして、私が口火を切らせていただくということで、喋りすぎるのが難点ですが、よろしくお願ひします。

米子市の総合教育計画を見せていただきました。米子市は最近、勢いを増しているということを最初に申し上げたいです。先だつての高校野球では、鳥取県立米子東高等学校が春夏連続の甲子園出場で、強豪相手に本当によくやったと嬉しくなりました。やはりスポーツも文化も全て進みつつある伊木市政の勢いの現れだと思います。私は、平成27年度から教育委員をさせていただいております。米子市の第3次総合計画（米子市いきいきプラン2016）が平成28年度から平成37年度の期間、米子市教育振興基本計画が平成24年度から平成33年度の期間ですが、私が就任した時に見直しの時期が重なり、平成29年4月に見直し案ということで、後期期間の基本施策を決定させていただきました。その協議に携わらせていただく中で、2～3点、見直しの観点が出ておりました。例えば、良いほうでは、米子市は大山や海等の自然豊かで、幸いなことに経済産業省の指標で“暮らしやすさ日本一”になりました。それによって、郷土愛、ふる

さと愛が高まってきました。別の観点では、生産年齢人口が減少している中で少子高齢化の対策を後期期間にどうするべきか。ちょうどその見直しをしていた時に伊木市長の新しい方針が出て、ぴったりと一致したということです。その後、浦林教育長が就任されました。浦林教育長は数学専攻ということで、伊木市長とどちらも数字に明るいという中で、本当に勢いがつく施策に取り組んでいただきました。見直し案の中では、高度情報化社会において、命を大切に作る自尊心が足りないのではないかとことも挙げられていました。そのような良かったこと、悪かったことを踏まえた後期期間の基本施策で実際に平成 30 年度、31 年度と取り組んできています。先ほども言いましたが、伊木市政になってから勢いが増してきました。行政の勢いであろうと思います。

そのような中で、本日の議題のふるさと教育、あるいは米子市オープンスクール。英語教育も見直し案の中では入っていましたが、特にふるさと教育、米子市オープンスクールは、その流れを受けて絶好の議題であると思います。ぜひ、本日しっかりと委員の皆さん全員が思いを言っていただいて、良い話し合いになると良いと思います。

最初の議題のふるさと教育について私が言いたいのは、郷土で働きたいということについては、何かきっかけがあるのではないかと思います。そのきっかけは何かと言うと、おそらくショックや感激、誇りや愛着を持てるような体験。もう一つは、役割や体験を通してこの地域で自分は役に立ったというような自己有用感。それからモデル像。近所の誰か、お兄さんでもお姉さんでも良いので、「これはすごい人がいる。自分も起業しよう。」というような、そのようなモデル像があると良いのではないのでしょうか。それから、シビックプライドについて、もう少し深めて話し合っていきたいなど。私が言いたかったのは、そのようなショックや感激をどうすれば皆さんに仕掛けられるかだと思います。まずは口火ですので、私の意見にはとらわれないように、ぜひご意見をお願いします。

■伊木市長

ありがとうございます。そうしますと、他の委員の皆様からもご発言をいただければと思います。

■荒川委員

先ほど、冒頭の市長の挨拶でがいな祭の話がありましたが、私自身もがいな祭に初めて参加させていただいたのですが、子どもの出し物は、当初はありませんでした。「これを見ているだけで良いのだろうか。」と衝撃を受けたのが第一印象で、「ぜひ、自分の子どもたちに、こういうことを体験させてあげたい。」という強い思いがあったのですが、それは自分の力のみではどうしようもなく、子どもが大きくなって、すごく残念だと思ったことを、鮮明に思い出しました。市長のお話を伺って、金山委員のお話もそうですが、様々な嬉しかった体験やショック、そのような体験を子どもの時代にいかにたくさん経験するかだと思います。市役所の中には様々な担当課があると思いますが、子育てをする中ではそのようなものはあまり関係なく、日常的に点在している様々なチャンスをとらえて、子どもたちに仕掛けていくと、将来米子に戻ってくる子どもたちが育つのではないかと伺っていました。

そのような中で、成人式をぜひ郷土の良さを感じてもらえる場にしていただきたいです。今も、とても落ち着いた、心に残る成人式ではありますが、子どもたちが知らない文化や伝統芸能もあると思いますので、そのようなチャンスもぜひ利用していただきたいです。成人式に久しぶりに戻ってくる子どもたちが、「米子にはこんな

文化がある。」と気付いてもらえる一つのチャンスでもあると毎年感じています。子どもたちに対して仕掛けていく様々な工夫が、私たち大人には求められていると思います。それは学校生活の中でも同じだと思いますが、日々そのようなことを感じています。

■伊木市長

ありがとうございます。

■荒川委員

がいな祭は見るだけでも楽しいですが、年に1回でもあのような場で踊ることによって、それが身体に染みついて、子どもたちが大きくなった時に、「がいな祭だから米子に帰ろう。」ということになるのではないかと、今改めてそのように思いながら聞いていました。

■伊木市長

ありがとうございます。

■三瓶委員

私自身の娘が今、小学6年生で、まさにふるさと教育に参加させていただきました。保護者の目から、子どもが市役所や野球場等の実際の様々な職場を訪問し、調べているのを見ていました。私の娘は耳が不自由な人が集まるサロンを訪問して、「なぜこの場所にサロンを立ち上げたのか。」「どのような工夫がしてあるのか。」「どのような貢献があるのか。」等様々な話を聞いたようです。そのようなことを子どもたちが一生懸命調べて、夏休みの間に子どもたちが自ら「この日で良いですか。」と訪問先に予約の連絡をして、実際に訪問して様々な話を聞いて、「こんなお仕事があるんだ。」「こんな素敵な場所が米子にはあったんだ。」というようにすごく感銘を受けたみたいです。私自身も知らないことがたくさんありました。子どもたちによる発表の場があり、皆が大きなポスターを作って、小学校の体育館にお世話になった方々を招待して、「保護者の方もどうぞ。」ということで、発表を見に行きました。子どもたちの人数が多いので、一つのブース当たり5分程度の短い時間ではありましたが、子どもたちが訪問して実際にお世話になった方々が小学校に来てくださって、子どもたちと一緒に一生懸命説明してくださいました。それがすごく嬉しかったです。そうして、絆というか、人と人とのつながりが生まれていくと感じました。これはぜひ続けていくと良いのではないかと思った施策でした。

先ほど、市長や委員の皆様が仰っていたがいな太鼓やがいな万灯等の文化もそうですが、小学生が中高生になっても「やっぱりもう1回やりたい。」という思い出を胸に、大人になってからも「またやりたい。」と思った時に、「やっぱりまた米子に住みたい。」という気持ちが生まれることはとてもあると思いますので、小学生の頃から様々な体験をさせてあげることが、私はとても大切なことだと思いました。

■伊木市長

ありがとうございます。上森委員、いかがでしょうか。

■ 上森委員

キャリア教育自体、近年はニートや仕事に就かない若者が増えて、職業や社会の仕組みに対する意識が今の教育の中では少しかけ離れたものになっていて、義務教育、学校教育が終わった後、なかなか社会に出ていけないという問題点からキャリア教育が特に注目され、学校に取り入れられてきたのだと思います。その一つとして、このふるさと教育も入っているのではないかと感じております。その中で、市長が仰ったがいな祭の話も全くその通りだと思います。やはり小さい頃から様々なことを体験させ、感動を与えることが、将来の自分が何かをやってみようという時に、子どもの中で大きな判断材料になるのではないかと考えています。今の若い人たちは、それこそインターネットやバーチャルの世界でしか生きてきていないので、痛みがわからないところがあると思います。これまで教育委員をさせていただいた中で、学校だけでキャリア教育、そのような体験をさせることには限界があるような気がしています。やはりキャリア教育であるならば、実際にキャリアの方に来てもらって、その実体験を聞いたり、一緒に物事をさせたりするというようなこと、少しずつ縦割りを横につないでいくことをしていかないと、キャリア教育は頭打ちになるのではないかと考えております。行政の中でも、教育委員会だけでは限界があると思います。機構改正で文化課や体育課が市長部局に移管し、これまでと異なる切り口で文化やスポーツを活かせないかということを模索していただいている、様々な実績が出てきていると感心しております。キャリア教育は、やはり民間の様々な方ものを取り入れていくのが良いのではないかと思います。ふるさと教育は、これまでの様々な場面で活躍された方の話も大切ですが、実際に今の現場で、社会で活躍されている人の生の声を聞くことを、ぜひ米子市の教育の中に取り入れられると良いと考えております。

少し長くなりますが、私としては教育委員でありながら企業人としてそのようなことができないかということで、キャリアで言えば生産年齢人口の専門の技術者が本当に少なくて困っているところなんです。そのようなことで、豊組合であれば豊の文化や和の文化をどう伝えていくかということで、伯耆町の岸本中学校、溝口中学校の家庭科の教育の中で、豊の歴史を学んだり、豊を実際に子どもたちに作ってもらったりするというのも、この5年くらい、毎年させていただいております。米子市でもできればと思っており、あまりに生徒数が多いために全ての学校ではできませんが、そのようなことをやっていただける中学校があれば、いくらでもさせていただきます。また、インテリアの授業について、例えば自分の家を改装する時に、どのように色を決めていけば良いかというようなことを喜多原学園でされています。子どもたちは、本当に自分たちが実際に社会に出て、「ああ、このような職業があるんだな。」というように随分興味を持って一生懸命やっています。それが、実体験を伴うキャリア教育ではないかと思っております。このような授業をできないかと、一般企業や団体に言っただけならば、いくらでもそのようなサービスをすぐに構築できるのではないかと考えております。

■ 伊木市長

ありがとうございます。委員の皆様のお話を聞いていますと、地元には様々な題材があるということ、そして最後に上森委員が仰ったように、「子どもの教育のためであれば一肌脱ぐよ。」という大人がたくさんいるということを感じました。

では、最後に浦林教育長、まとめていただけますでしょうか。

■ 浦林教育長

最近、ふるさと教育という言葉がクローズアップされていますが、学校現場でふるさと教育をする時間は実際にはないというのが現状で、資料 1 に記載されているように、生活や社会のような様々な学習の中でそのような力をつけています。資料 1 では、例えば「愛着を持つ」と書いてある左横に、ふるさと教育のねらいが記載されていますが、学校では一つ一つの教科や領域のねらいを達成することが主眼になっていて、教科ごとの振り返りは行いますが、ふるさと教育のねらいは達成できているのかという振り返りが十分にできていません。1 年生が終わる時等に、それまでに様々な勉強をしてきたが、それによって米子についてどのように感じたかという振り返りを行い、2 年生になった時に 1 年生の時の自分の感想を読みながら、自分の成長とともに米子のことを詳しく知り、米子の良さを知ってほしいと思います。そうすれば、平面的ではなくて立体的に米子のことを知ることはできないかと思います。先ほども話に出ていましたが、がいな万灯やがいな太鼓のような学校教育以外の社会教育の部分、また、行政の勉強をさせていただくことによって、その膨らみがさらに大きくなっていく。そのような方向で、ふるさと教育に取り組んでいかないといけないのではないかとということも新たに感じました。いわゆる民間の方のお力を借りるのも当然のことですので、学校教育でやる部分はありますが、そこにどのようなプラスの膨らませる要素を取り込めるかがこれからの教育委員会に求められる内容になるのではないかと、改めて気を引き締めていきたいと思いました。

それから、先日の庁内の総合計画策定本部会議に市長が同席されていましたが、ふるさと教育を計画のどこに盛り込むかという議論をしましたが、私がその後考えたところ、自尊感情の部分とつながるのではないかと感じました。というのは、ふるさとを愛するという以前に、自分や家族や友人を愛するということをなしにして、いきなりふるさとを愛するというのも乱暴な話だということがあり、ふるさと教育を推進すると同時に一人一人の自尊感情を高める教育も並行して力を入れていく必要があると思います。そのような中で、素晴らしい先輩に学んだり、周りの家族の素晴らしさを感じたりする、そのような展開を次期総合計画の中に盛り込んで取り組んでいくと良いのではないかと改めて感じました。様々な意見を聞かせていただいて、大変勉強になりました。

■伊木市長

ありがとうございます。このふるさと教育について、委員の皆様が言われたことを念頭に、最後に浦林教育長にまとめていただきましたが、教育委員会においても既存のカリキュラムとの整合性・バランスを取りながら苦心して取り組んでいただいております。そこで受け止めきれないところに市職員や民間の皆様の力を入れて、ふるさと教育を成し遂げていきたいと思います。今後とも引き続きよろしく願いいたします。

それでは次の議題の米子市小学校オープンスクールについて、事務局から説明してもらいます。

■西村学校教育課長

学校教育課からご説明させていただきます。昨年度もご説明させていただきました米子市小学校オープンスクールですが、1 年の計画期間を経て、本年 6 月に市内 8 小学校でモデル実施しました。この事業は、資料 3 の「幼稚園・保育園・認定こども園・小学校 切れ目のない支援体制」の一環として、全体計画のもとで本年度より実施しているものです。

資料 2 は、今年度のオープンスクールに参加された保護者に対して行ったアンケート調査をまとめたもので

す。結果を見ると、本事業の目的である「小学校生活への期待の高揚と不安の軽減」や、小学校と保護者はもちろん、保護者同士の交流に関する各項目で概ね肯定的に評価していただき、事務局や学校も手応えを感じております。ただ、「保護者同士の顔見知りができた」という問いに対する評価が相対的に低く、保護者同士がつながるための取組に課題を残しております。また、参加者が次年度に就学する予定のおよそ4割から6割ということであったため、残りの4割強の方々にもどのようにして次年度以降に参加してもらえるか、そのためのアナウンスや全体的な施策の工夫を行っていかれるかどうかも課題であると認識しております。

今後の流れにつきましては、資料4のとおり、モデル校での今年度の課題や成果を、この後、市内の全小学校に情報提供する中で、来年度は市内の全小学校が、中学校区ごとに同日開催し、さらにその翌年は市内一斉の同日開催を行っていきたくと考えております。

■伊木市長

ありがとうございます。

■湯澤こども未来局長

福祉保健部こども未来局から説明いたします。先ほど、学校教育課より説明があったように、「就学前の施設と小学校をつなぐ切れ目のない支援体制」という取組の一環として、本年度初めてオープンスクールを米子市で開催しております。初めての取組ということで、小学校では児童と小学生との交流、保護者同士の交流ということで、とても工夫して取り組んでいただいております。今年度は8校限定での開催でしたが、早く全校で開催していただきたいという保護者からのご希望もいただいております、大変有意義な取組であったのではないかと考えております。そして、この切れ目のない支援体制の取組は、昨年から教育委員会、こども未来局が連携を強化する取組を進めており、今年が2年目です。就学前だけではなく早い時期、年長や年中の頃からでも小学校と園が連携していくことがとても重要なことであり、早期に子どもや保護者の心配や不安に寄り添って支援をしていくために、早い時期から園と小学校が情報交換や引き継ぎを行うように取り組んでおります。忙しい小学校や園の教職員にもしっかりと取り組んでいただいております、ますます充実させていきたいと考えております。全ての子どもが、入学という大きな節目を期待を膨らませて迎えることができ、就学後も一人一人の個性に合った環境で育っていけるように、教育委員会とこども未来局も取り組んでいきたいと思っております。

■伊木市長

ありがとうございます。今年度から保小連携というテーマのもとに始まった米子市小学校オープンスクールですが、やればやるだけの成果が出ると聞いております。ハード面においても、啓成小学校については、近隣の東保育園の建替と併せて、同じ敷地に小学校と保育園を並べるのか、混在させるのか。ハード面でもこの保小連携、小1の壁をなくそうという取組を進めていくことになっています。この議題について、皆様からご意見をいただきたいと思っております。

■金山委員

5歳児検診を大事にするという伊木市長の基本的な考えのもとで連携ができつつある中で、土台ができているからオープンスクールのような連携もできそうだと感じております。先日、実はオープンスクールに3、4校回ってみました。保護者アンケートにも書かれていますが、子どもも親もワクワクドキドキしながら興味・関心を持ち、先生の笑顔を見て「子どものことを考えてくれているんだなあ。」と、また、子どもが安心して笑顔でいるのを見て「自分の子どもは決まりが守れるのではないか。」という安心を感じたということで、本当に小1ギャップ以前のもう1年前の壁が外れていきそうだと私は感じております。

もう一つは、教員も育っているということを感じました。教員の姿を見て、子どもが手を叩いて喜んでいました。子ども向けテレビ番組のお兄さんのようで、「この先生は上手いなあ。」と思って聞いてみると、実は講師ということでした。そのような中で、「教員も育っているんだなあ。」と感じました。このオープンスクールの流れはずっと続けていかないといけないと思います。今年が1年目なので、期待の高揚や不安の軽減については達成できたということでした。

もう一つは、5歳児検診について、もう少し早めに、5歳になるまでに知りたい保護者や子どもがいるのではないかと。例えば、特別な支援を要する子や難病の子、あるいは院内学級の子等様々な課題を抱えた子がいますが、やはり5歳になるまでに親も子どもも悩んでいる中で、いかに安心感を与えることができるかを考える必要があると思います。学校に行って安心したということもあると思いますが、やはり医療機関も一歩前に、学校に対してはこうだということを、学校や教育委員会と連携しながら1年生への就学指導について尽力いただくことを考えております。一人一人の様々な条件があり、その条件に対して普段想像できないような苦しみを感じていらっしゃる方もいる中で、いかにそれにきちんと寄り添っていけるのか、今後の課題として、さらに医療機関との連携も含めてもう少し発展させていけると素晴らしいものになるということを感じました。

■伊木市長

ありがとうございます。

■荒川委員

私自身も前回のオープンスクールに参加させていただいて感じたこととして、やはり保護者の安心した笑顔はすごく印象的でした。自分の経験から重ね合わせても、就学前の段階では、小学校の敷地や建物に入ること自体がすごく不安だと思うので、本当に大きな意義のある取組だと感じております。先ほど、西村学校教育課長から課題等の説明もありましたが、やはり継続していくことが一番重要ではないかと感じております。継続することによって、「毎年、米子市はこんなことをしているよ。」「今年はいつかな？」と保護者のアンテナや意識も変わっていくと思います。今後も継続していただきたいということと、もれなく情報を周知できるような工夫をしていただきたいと思います。圧倒的多数の方が参加されていたのに、「そもそも情報を知らなかった。」ということがあると、その段階で残念な気持ちになって入学することになると思うので、情報の周知の方法について工夫をしていただきたいです。一方で、先生方のご負担はどうなのかということも危惧しているところです。子どもたちにとっては非常に良い取組だと感じているので、ぜひ継続していただきたいというのが一番強い想いです。

■伊木市長

ありがとうございます。

■三瓶委員

私も経験上、幼稚園・保育園から小学校に上がることは大きなステップで、子どももちろんですが、保護者としても不安が大きい時期でした。そのため、このような形で小学校の中を見て、先生方の顔を実際に見て表情や話し方を見て安心できる部分は多いと思います。このオープンスクールという取組は、希望としては年に1回ではなく、2回くらい実施してほしいと感じています。

■伊木市長

ありがとうございます。

■上森委員

この度、啓成小学校と東保育園が同じ敷地内に建てられるということですが、自分がちょうどその時期、小学校と幼稚園が同じ敷地にあり、幼稚園から小学校の体育館を通じて行き来していた経験を、今、思い出しています。そのため、小学校に上がる時は、それほど不安はなかったと思います。今思うと、それが元々あったオープンスクールなのではないかと思っています。そのようなことからすると、この度の啓成小学校と東保育園がどのような形で、教育の場で交流を深めていくのかという米子市の一つのモデルケースになるのではないかと、とても楽しみにしたいと思っています。今後、少子化になればなるほど、そのような統廃合の中で学校教育の環境を作っていくかという一つのモデルケースになるのではないかと考えておりますので、一緒に様々なことで連携して関わっていければと思います。

■伊木市長

ありがとうございます。最後に上森委員が言われましたように、確かに時代が変わり、昔の子どもが多かった時代には隣近所に小学校のお兄さんがいて、「この人たちと一緒に行くんだなあ。」と、幼稚園から、あるいは保育園から想像していたかもしれませんが、今は子どもが少なくなり、子どもたちのそのような機会が減っている中で、このようなオープンスクールの機会を作ってスムーズな小学校1年生への入学を果たそうというねらいであります。先ほど、荒川委員から先生方の負担というお話がありましたが、この件について、「オープンスクールの段階で少し苦勞をしておくほうが、子どもたちが1年生に上がってから長い苦勞をするよりは良いだろう。」という選択もあったという話を聞いたこともありますので、やはりこれは小学校側としても必要な事業ではないかと思いました。浦林教育長は、どう思われますか。

■浦林教育長

今、市長が仰ったとおり、私がこのオープンスクールを最初に考え付いたのは福米東小学校の校長をしていた時で、90人の子どもが29園から入ってくるということを調べてみて、これは大変だと思いました。まとめて入ってくれば人間関係がありますが、ばらばらで90人やって来れば、それはまとまらないだろうと。その時にも

保育園との交流はしていましたが、実際に入学する学校ではやっていないため、もう少しリアリティがないというところから思い立ったものでした。一人で入ってくる子どもも保護者も不安で、誰に相談してよいかわからないというところで、これを打破したいというのがスタートでした。ちょうどその時に5歳児検診が始まり、これ幸いというところでは取組を始めたところです。実施して一つ感じたことは、米子といってもとても地域性があり、地域・学校によって本当に異なるということでした。そのため、今回は、教育委員会が方針を出しましたが、「内容等は学校や中学校区ごとに相談してください。」とお願いしました。これは正解だったと思います。「この内容で。」と実施していたら、おそらく地域によって失敗したり上手くいかなかったりしたところがあったと思います。これからもそのような声を学校の形に合わせながら進めていきたいと思っております。

一方で、4割程度は参加していないということが課題だと思っており、全員に参加していただくために、再来年には同じ日に開催したいと思っております。その意図として、本当は学校の都合に合わせた日に実施するのが良いということはわかっているのですが、例えば、「6月の第一土曜日は米子市の小学校オープンスクールだよ。」ということを広めていき、皆が参加するものにしたいと思っております。そうすれば、現在の参加者の6割が8割、9割になり、最終的には市外や県外から米子市の小学校に入学を予定している方にも伝えて、全員に参加していただきたいという思いを持っております。

それから、アンケートはざっと見れば良いものとは私は思っておりません。資料2の▲の記述内容や円グラフの赤い箇所の意見を生かしてこそ米子市オープンスクールだと思っておりますので、マイナスの内容を書いているだけの方が大変ありがたく、それによって次に向かえろと考えております。「実施して良かった。」で終わる気は全くないという思いです。まだスタートしたばかりですので、我々だけでなく様々な方々のご意見を拝聴して、ぜひより良いものにしていきたいと思っております。今後も実施し、10年後に「米子の良い宝になった。」と言ってもらえるようなものに、ぜひ育てていきたいと思っております。皆様、よろしくお願ひいたします。

■伊木市長

ありがとうございます。この米子市小学校オープンスクールは、引き続き実施し、経過的に成果をチェックしていただいて、より良いものにしていきたいと思っております。

続きまして、3つ目の議題になりますが、英語教育について学校教育課から説明をお願いします。

■西村学校教育課長

英語教育について説明させていただきます。小学校では、令和2年度より新学習指導要領が全面实施されることになっております。その中で、小学校5、6年生では外国語科が新設されます。現行は外国語活動を年間35時間行っておりますが、来年度からは外国語科を70時間行うこととなります。3、4年生では現行0時間ですが、外国語活動が35時間新設されることになっています。現在は移行期間で、米子市立小学校では、5、6年生で年間50時間、3、4年生で年間15時間の外国語活動を行うという移行措置を取っております。

現在、国では、子どもたちの英語力の中でも特に話すこと、書くこと等の発信力、コミュニケーション力の課題や、地域による取組の差等を踏まえ、その状況を的確に把握して指導と評価の改善を促すために、本年度より全国学力学習状況調査において、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの4技能を測る調査を実施

しています。このような中、米子市では、小学校英語専科加配として、外国語活動を専科指導するための加配教員を3小学校に配置しています。また、小学校専科加配として、一部外国語活動を指導するための加配教員を1小学校に配置しています。そして、県が配置する非常勤講師である外国語活動支援員を21校に配置しています。それから、ALTを6名、市内の全小中学校を巡回する形で配置しており、英語教育の充実に努めています。

■伊木市長

この件につきまして、委員の皆様からご意見をいただければと思います。

■三瓶委員

私自身、外国語活動支援員を務めさせていただいております。子どもたちは皆、英語が大好きです。英語はやはりコミュニケーションの取り方の一つで、例えば教科書を見て、「この文章をやります。」となった時に、子どもたちが自発的にこの文章を使いたくなるような場面を作っていけないといけないというのが、おそらく先生達が授業を組み立てる際の一番の課題だと思います。それが実現すると、子どもたちは笑顔で楽しく、心から自分のものとして英語を発することができると思います。現在、私が知っているのは一つの学校ですが、子どもたちは皆笑顔です。先生が外国語支援員であれ、ALTであれ、担任の先生であれ、「英語は楽しい。」となっていることが、とても喜ばしいことだと思っています。子どもたちが中学校に上がる時に、「中学校から英語が始まる。」という不安を少しでも軽減させてあげられればという思いで私は教えています。

ただ、どの議題でも課題はあると思いますし、どの教科もそうかもしれませんが、やはり個人差が強く出ています。英語の授業について話す時、皆笑顔で「楽しい。大好き。」となるのですが、「さあ、書くよ。」とか、「さあ、読むよ。」という時にポカンとしてしまう子が何割かいることが課題なのではないかと感じております。中学校の先生に、「小学校の英語に何を期待していますか。」と直接聞いたことがあり、その時の答えは、「やはり英語を嫌いにならないこと。」、ただそれだけでした。「読む、書く、それ以前の問題で嫌いになってしまうと、その時点でコミュニケーションを取れなくなってしまうので、「英語を使って。」とか「コミュニケーションを取りたい。」という気持ちを大事に、小学校の英語に取り組んでほしい。」ということも言われましたので、とにかく笑顔でレッスンすることを私は心掛けています。

■伊木市長

ありがとうございます。いわゆるコミュニケーションを重視する部分と、いつか来るであろう、高校入試や大学入試のように得点を取らないといけないという話がどうしても混在するところで、仕方ない部分があるかもしれませんが、そこをうまくクリアして、楽しいものにしていけたらというところでしょうか。他の委員の皆様はいかがでしょうか。

■金山委員

英語教育について一つ考えておかないといけないこととして、「英語嫌いをなくすために、間違いを恐れず、どんどん書こう、話そう。」という指導の方向性について、鳥取大学の先生が懸念を仰っています。これをもう

一度確かめてから方向づけないといけない、ということを抑っていました。

■伊木市長

金山委員は、「間違えることを恐れるな。」と指導されていたのですか。

■金山委員

そうですね。先ほど三瓶委員が仰ったように、嫌いになられたらそこで終わってしまうので、楽しく。これが大事だと思います。

■伊木市長

そうですね。今日のテーマは小学校の英語教育ですから、小学校の間は楽しむことを重視すべきということなんでしょね。他の委員の皆様はいかがでしょう。

■荒川委員

小学校の先生方の中には、英語の指導方法を大学等で学ばずに免許を取得されている方もたくさんいらっしゃると思います。先生方が自信を持って指導できるようにするために、近隣の高校等にはエキスパートの教員の先生方がいらっしたり、様々な機会があったりすると思いますが、先生方の研修の機会等を工夫していただいて、先生方がしっかり力をつけて子どもたちに接していただくことより良いと思います。予算の問題も当然あると思いますし、実際には授業もありますが、私の中では、英語を教えない前提で教員免許を取られた先生方も、しっかりと子どもたちに笑顔で授業をしていただけるような準備がとても重要だと感じています。

■伊木市長

米子市として、英語専科教員の対応について、鳥取県に要望を出しております。資料5に記載されているとおり、市全体でまだ3校です。この件について、充実を図れるように努力していきたいと思います。上森委員はいかがでしょう。

■上森委員

やはり各学校に英語をきちんと教育できる先生がいらっしゃるの理想ですが、それは叶わないことが現実であり、荒川委員が仰ったように、それを補うために教員が勉強するか、民間からボランティアで指導に来てもらうということも一つの方策だと思います。市全体で英語専科教員が3名しかいらっしゃらないので、教員がいる学校とない学校とで差がつくのではないかと思いますので、それを補うために様々なことを駆使しながら取り組まないといけないと思います。私としては、海外に行く時、英語を話せないために一歩下がるところがあります。英語を話せる方は前に出てコミュニケーションを取れますが、話せないと一歩下がって首を振っているぐらいです。今でこそGoogle翻訳といって、すぐ英語に翻訳してくれる時代になっていますが、自分で英語を話せるということになると、世界に出ても一歩前に出てコミュニケーションを取る若者が本当に増えてくると思います。そのような世界でも通用する若者を作るためには、やはり英語教育が本当に大切だろうと思います。限ら

れた予算の中で、苦労しながら力を注ぐべきだろうと思います。

■伊木市長

ありがとうございます。委員の皆様から様々な意見をいただきましたが、浦林教育長はいかがですか。

■浦林教育長

私が学校を見ていて、もう少し苦戦するのかなと思っていましたが、小学校の教員は柔軟というか、1年生を相手にしたりするわけですので、様々な教科を教えているということもあるのか、中学校や高校の教員と比べるとコミュニケーションが圧倒的に得意だと思います。すごく心配していましたが、頑張ってくれているという所感です。ただそこだけではなく、委員の皆さまが仰ったように、教育委員会としては授業の質を確保することを絶対にしなければなりません。そうすると、やはり研修によって、さらに教員自身が様々なことを身に付けたり、良い例をもっと紹介して見ていただいたりする必要があると思います。それから、市長が仰った、専門に教える教員を確保すること、このあたりが非常に大きなポイントになると思っております。

子どもたちが楽しそうにやっている授業を見て、「私に振らないでほしい。」とドキドキする私は何だろうと、少し恥ずかしい思いをしながら話しかけられて、どきまぎしながら答えています。そのような部分は、私よりはるかに小学校の教員は頑張っていて、線をはるかに踏み出してやってくれています。これについても、三瓶委員のような支援員の方やALTと一緒にやっているというところで、そのようなスピードが速かったのではないかと思いますので、そのような方がもっと充実すると、もっと良い授業ができるのではないかと思います。英語に触れる機会が県内では多いほうだと思いますが、おそらく都会に比べるとどうしても少し少ないかもしれないという心配も持っておりますので、そのようなことによって子どもたちが困らないように、早めに手を打っていかないといけないという認識です。

■伊木市長

ありがとうございます。この議題につきましては、浦林教育長にまとめていただいたように、来年から本格的に実施するということが様々な課題はありますが、前に向かって頑張っていたきたいと思います。

用意した議題は以上ですが、時間が若干余りましたので、残りの時間で別の議題について話したいと思います。

現在、米子市美術館で「チームラボ 学ぶ！未来の遊園地」を開催しており、多くの人でにぎわっております。昨日（8月27日）、入場者数の目標40,000人を達成いたしました。残りの期間で来られる方は全て目標に対する余剰で、とても良い状況が続いています。一つ感心したことがあります。デジタルアートについて主催者に話を伺うと、ご自身のお子様がスマートフォンをいじって一人ですっと籠っている様子を見て、「これはまずい。」と思ったことがきっかけだったということです。つまり、ご自身がデジタルの世界にいながら、お子様が人とコミュニケーションを取らずにスマートフォンを一心不乱にいじっている様子を見て危機感を覚えたということでした。そこで、同じデジタルの世界で、いわゆる共に創る「共創」ということで、アートを一緒に創り上げる世界を表現してみたかったというのがこの企画の主旨、コンセプトと聞き、大変感心いたしました。私自身も子どもを持つ親として、スマートフォンを使うなど言うことはもう無理な時代に入りましたので、どのように付き合

っていくのかを子どもたちにどう教えるかについて、非常にわからないことがたくさんあります。

4 回目の議題といたしまして、スマートフォンの積極的な活用等について、委員の皆様のご見解をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

■ 金山委員

私は日本教育新聞を何年も購読しており、その中で京都大学の先生が、子どものネット社会をテーマに連載をいらっしゃいます。先生が行った聞き取りの中で、ある子どもが次のように言ったと書いてありました。理解できますでしょうか。「かまちょが、裏垢に、ハッシュタグ、死にたい、で即リプ」。「かまちょ」というのは、「かまってちょ。」という根暗の子どものこと。「裏垢」というのは、本人のアカウントを使わない裏のアカウントのことで、それを漢字で「裏」の「垢」と書くそうです。「ハッシュタグ」は「#」を入れると、「これを先に見てくれ。」というように最優先されるということだそうです。「即リプ」というのは、返事ですね。親が見ても、先生が見ても、何のことかがわからない。ではこのような会話の内容を誰が理解して、良い/悪いと言えるのかということ。少なくとも、現場の教員はこの意味がわかっているようです。これが第 1 回の連載に書かれていて、その後 20 数回連載がある中で、最新の連載では、ゲームの中で課金してレベルを上げていくとリーダーになり、自己存在感が高まる。だからアルバイトをして、中学生も高校生もこっそりバイトで稼いだお金を全て課金に注ぎ込むということだそうです。いじめから逃れるということでは、逆に尊敬心、自己存在感、自己有用感をアピールする。子どもがこのようにお金を使っているということを、親はわかっていないということだそうです。

私が言いたいのは、こうした携帯電話が持つ意味、子どもがこのように使っているということを研修をしないといけないということです。私も最初に見た時には何のことかがさっぱりわかりませんでしたので、どこかでこのような研修をしておかないと、とにかく知らなければ対応できないということでございます。

■ 伊木市長

ありがとうございます。他に委員の皆様はいかがですか。

■ 荒川委員

話が「チームラボ」のことになりますが、私も拝見させていただいて、理解不能の芸術だな、と私自身はもう頭が固くなっているのかと思ったのですが、とても楽しく拝見させていただきました。先ほどの議題のふるさと教育にも通じるところがあるかと思いますが、子どもたちがあのような機会に何かしらを閃いて、そこから子どもたちの夢や何か膨らんでいくと良いと感じました。また、来年度からプログラミングの必修化が始まり、時代に遅れることなく、地域格差の弊害を受けることなく、米子市でもしっかりと子どもたちのために様々な機会や勉強の方法等が考えられればと思っています。「チームラボ」の企画は、とても良い機会を設けていただいたとすごく感じます。

■ 伊木市長

一人でスマートフォンをいじっていると、やはり金山委員が仰ったような閉じた世界があるものですから、それをいかに「チームラボ」のように表に出して、オープンな場で表現してもらえるようにしていくかということは、一つ

の鍵だとは思いますが。三瓶委員はいかがでしょう。

■ 三瓶委員

私の子どもは小6と中3ですが、スマートフォンを持たせています。なぜかという、やはり調べものがしたいんですよね。子どもが何かに興味が湧いた時に、ぱっと調べられるのが何よりもスマートフォンの良いところだと思います。パソコンを開いて立ち上げて、という煩わしさがスマートフォンにはなく、子どもでも使える、子どもでも様々な情報を調べられます。ただ、私自身が子どもに口を酸っぱくして言っているのは、全部が本当のことではなく、きちんと見極めないといけないということです。それが少し難しいところでもあると思います。「チームラボ」の企画には私も最初の日に行かせていただいて、お話を聞いて、「確かにそうだな。」と思いました。今、子どもが遊ぶとなると、おそらくゲームが一番に来て、体を動かして外で遊ぶ子は減ってきているような気がします。スマートフォンは便利ですけど、金山委員が仰った面もあり、これからどのように使っていくべきか、教育的に考える時代になってきているのではないかと思います。

■ 伊木市長

ありがとうございます。上森委員はいかがでしょう。

■ 上森委員

私が現役のPTAの時に、携帯電話がだんだんと流行りだして、PTAで最初に携帯電話に関する研修を行った時は、「インターネットのいじめ等がある。」ということで、保護者はマイナスなイメージから入っていきました。スマートフォンについても、「インターネットの社会でこういうことがある。」ということを知った時に、子どもたちと親との間に、認識の違いも含めて相当ギャップがある中で、保護者や学校がインターネット社会の中でスマートフォンをどう使っていくかということを教えていくことについて、私は相当遅れているような気がします。親としても、子どもが欲しがるから安易にスマートフォンを与えてしまいます。今までは、家に電話がかかってきて、親が子どもに取り次いでいたのが、玄関がなく直接土足で子ども同士がコミュニケーションを取ると、その中で様々な情報、フェイクニュースやいじめがあつたりします。そのため、スマートフォンを持たせる側、使わせる側の責任がやはり大人にはあるのではないかと思います。そのような中、学校教育でどう進めていくかということについて、マイナスのイメージで「これはいけない。」ということばかりから入ったものですから、子どもに対して「あれはしてはいけない。これもしてはいけない。」と。そうではなくて、今回の「チームラボ」のように、「デジタルの中ではこういう楽しいことがある。こういうことができる。」ということも一緒に教えていくべきではないかと思います。文部科学省の調査では、携帯電話を持っている子どもの率は、小学校、中学校、高校とだんだん上がっていくようで、米子市もおそらくそれに近いだろうと思います。小学校はまだ10%ちょっとで、中学校も同じくらいですけど、この数年は10%を越しているのではないのでしょうか。三瓶委員が子どもにスマートフォンを持たせているように、子どもたちは、おそらく全員がスマートフォンを持たないと、子ども同士のコミュニケーションが取れないということになると思います。今度は、スマートフォンを持たせてどう使うかだろうと思います。調べものはすぐできてしまうので、これまでは辞書を調べて10分かかっていたのが、スマートフォンを使って調べると1分もかからずに情報が手に入ります。弊害もありますが、都会の学校や私立学校では授業でも取り入れられています。調べ

ものは、高校はもちろんよくて、大学になれば、スマートフォンがなければ授業にならないというぐらいになっているところで、小学校や中学校の義務教育の中で、米子市としてこうした機器をどう使っていかについて、チームを作ってでもやらなければ子どもとの差がだんだんついてしまい、逆にそういう子どもたちが学校の先生になってきています。平成生まれの人たちが先生になってきているので、若い人たちの意見を聞きながら、ITC を学校教育の中で生かせるように、抑止するだけでなく使うことによって、閉鎖された中でスマートフォンを使うのではなく全員がそのようになっていけば良いと思います。

■伊木市長

ありがとうございます。では、浦林教育長、お願いします。

■浦林教育長

やはりスマートフォンのように新しいものが出てくると負の側面が強調されますが、それを避けて通る社会や人生はないわけで、いかに乗り越えていこうかを考えることが大きな方向性だろうと思います。そのため、こうしたものをうまく活用し、より良く生きていくということが究極のゴールになるだろうと思います。

ただ、皆さんが仰るように、使い方によってはトラブルに巻き込まれて悲しい思いをするということも事実としてあるため、やはり大人がその社会を作っていくところが大事だろうと思います。直接関わってくるのは、やはり買って持たせる親の責任、それから、子どもに指導している学校の役割というのは、非常に大きいと思います。今、情報モラルの研修が PTA 等で熱心にされています。私も 1 年で 3 回同じ人の講演を聞いたことがあるくらい熱心にされています。こういうことをやはり粘り強くやることで、教員として初めて知ることがとても多く、こんなことがあるんだ、というようなことも初めて知り、それによって初めて子どもと付き合えるという部分もあると思います。そのため、やはり大人の勉強も必要で、子どもも勉強が必要です。子どもの勉強について、米子市では小 1 から中 3 まで情報モラルの年間計画を作っています。そのような中で、学校教育でも上手にこのようなものを活用できる子どもに育てようという、そういう方向で頑張っています。ただ、3 年前に作ったものが今ではもう遅れたものになっているかもしれませんので、日々更新をしながら進めていきたいと感じました。

■伊木市長

このテーマは、話し合いをした時点、また次の時点でさらに進んでいる、そういう世界だと思います。上森委員や浦林教育長が仰ったように、負の側面にはもちろんしっかりと光を当てて見える化していかなければならない一方、利便性をしっかり享受して乗り切っていかなければならない時代が変わったと確信した本日の話し合いだったのではないかと思います。そのことを念頭に置きながら、教育委員会でも講演等の機会を作っているだけではないかと思しますので、引き続き、この取組をお願いしたいと思います。

それでは時間になりましたので、本日はこれで終わりとさせていただきますと思います。予定していた議題は全てお話をさせていただきました。委員の皆様には、議事の進行につきましてご協力をいただきましたこと、改めてお礼を申し上げ、解散とさせていただきますと思います。ありがとうございました。

■長谷川総合政策課長

大変お疲れ様でした。これで、令和元年度第 1 回総合教育会議を終わります。今年度はもう 1 回、2 月頃を予定しておりまして、改めてご案内をさせていただきたいと思います。それでは皆様、本日は誠にありがとうございました。これで終わります。

11 時閉会